



決算書の活用法

公認会計士 長谷川佐喜男

決算書には、会社の実態が網羅されています。

決算書の仕組みを理解し、現在の状態を把握（経営分析）することにより、会社の今後の経営に役立たせることができます。会社の経営状態を見る場合、主に4つ視点があります。

「お金があって、簡単にはつぶれそうにないか」という「安全性」、「元手（資本）に比べ、どれ位効率よく経営されているか」を見る「効率性」、「儲け具合」を見る「収益性」、そして「どれくらいの借入れが可能か」を見る「借入余力」などです。

経営分析と言っても、どのような視点から行うかによって、様々な指標があります。

今回は、代表的な4つの視点から会社を捉え、貸借対照表と損益計算書を用いてできる経営分析を紹介します。自分の会社を客観的な数値によって評価することは、健全な経営状態を保つためには不可欠なことです。

(1) 売上高営業利益率【収益性】

売上高に占める営業利益の割合で、会社が本業で儲ける力がどれだけあるか、つまり「収益性」を表す指標です。

この比率が高いほど、会社の儲ける力が高いといえます。

$$\text{売上高営業利益率 (\%)} = \text{営業利益} / \text{売上高} \times 100$$

(2) 自己資本比率【安全性】

自己資本の総資産に対する割合であり、会社の財務体質が安定しているかどうかを表す指標です。

この比率が高いほど、財務の安全性は高いといえます。

$$\text{自己資本比率 (\%)} = \text{純資産 (自己資本)} / \text{総資産} \times 100$$

(3) 総資本回転率【効率性】

総資本（＝総資産）が売上という形で、1年間で何回回収されたかを表す指標です。

少ない資産で売上を増加させることが目標であり、この回転数が高いほど、総資本（＝総資産）が効率的に活用されているといえます。

$$\text{総資本回転率 (回)} = \text{売上高} / \text{総資産}$$

(4) 借入金月商倍率【借入余力】

有利子負債（短期、長期借入金等）が1ヶ月の売上高の何倍にあたるかを表し、借入れをする余力があるかを示す指標です。

この倍率が低いほど、借入れをする余力が高いといえます。

$$\text{借入金月商倍率 (倍)} = \text{短期・長期借入金} / \text{売上高} \times 12$$